

「敍意一百韻」を鑑賞するにあたって

太宰府天満宮の祭神となつてゐる菅原道真公は今から千百年以上前に今で言う総理大臣の地位から、突如として西の果て、西国太宰府の地に左遷され、わずか二年余の歳月で客死したことは周知の事実だが、その太宰の地で京都を思い、家族を思い、自分の過去の栄光と現実の太宰府での囚われの身の落差を嘆く作品を漢詩という形で五十首弱残していることは余り知られていない。その作品が『菅家後集（かんげこうしゅう）』と呼ばれるものの中に収められている。私は縁あつてその作品を読み解く作業を続けて久しく時が経つが、その作品群の中でとりわけ異彩を放っているのが「敍意一百韻」といわれる、全て当時の中国語で、しかも完璧なスタイルで執筆された最高傑作といわれる長編である。（二百句という道真公の五百首余の作品中最大の長編である。）

これを二年掛かりで、大牟田・荒尾市民の有志「道真梅の会」の会員六名の方々と毎月一回の講読会を続けこの三月に全篇を解釈し終えるところまでたどりついた。この市民六名の方が一人も欠けることなく、しかもお一人お一人が仕事を持ちながら寸時を惜しんで課題に取り組み、月一回の講読会に二年という長期に亘つて臨まれたその熱意は各人の持つ資質と真面目さに負うことと言うまでもないが、それと同時に、この作品に取り組んだ私たち一人ひとりが、道真公のこの作品で訴えようとしたことが千年以上の時空を超えて現代に生きる私たちの心を揺さぶらずにはいられない、そんな迫力に魅せられたからだと信じている。そしてそれを、まだ何も解いていない方々にこの作品の魅力を伝えたいという願いから、一冊の書にまとめようという声が上がリ、「道真梅の会」の方々と又何度も編集会議で原稿を持ち寄り討議し、やっと一冊の書として公にすることが出来た。